

京鹿子

京鹿子
月刊
創刊
1971年
10月
1日
創刊
1971年
10月
1日

7月号

夏季吟旅特集号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その九十四



病廊に小さき囁き紙幟
枕辺の夢のいちりん薔薇の夜
薔薇を剪る胸に一つの棘育つ
母の日や左さがりの崩し書き
次世代へチャット叛乱濁り鮎
群れてより騒人気取り火取虫

領海てふ杓子定規くらげ浮く
妻の忌の独り関白うなぎ食ふ
校了を促す使ひ黒あげは

円紅七月号「虹」

手のひらに夕虹を乗せ北帰向
夏蝶の影と0番線ホーム
望郷の軋むレールや遠き雷
腕を組み文豪気取り星涼し
手に苞の麦わら細工虹二重

近詠

名誉顧問

和田 照海



曾我の雨

だしぬけに存問といふ曾我の雨
サーファアの波を誇りて戻りけり
夏鷗やメリケン埠頭の赤いくつ
はまの夕焼大観覧車停車せず
消ゆるまで虹を見てゐる休養馬

近詠

名誉顧問

塩貝 朱千



花しぐれ

夢の中に君はゐませじ花しぐれ
桜吹雪真只中にゐてひとり
花の逢瀬果せぬままに散りゆけり
夕靄や桜はバラ科といふ不思議
花は葉に上枝の小鳥見失ふ

神麓集

近詠

福主宰

村田あを衣



春満月

鳥羽街道 缶からからと春一番
酔をきかす 龍馬通りの 龍馬寿司
龍馬恋ふ 蝶よ寺田屋ここに居り
真言はさゆれず 松の芽立ちかな
春満月 ころころ 結びの糸電話

白百合 沼田巴字

さくら 直江裕子

鉄砲白百合新婚の家大きく咲き
田の草取る 芳の苦しみ日向水
藁しべを流す 雷雨や街の川
梅雨晴れやしべに坐したる 仏達
白百合の咲くこの地球残れかし

終はりなき彷徨に似て 青き踏む
からからと死を口に する四月馬鹿
あるがなき 一生蝶を探して た
梅林のいちばん端は 外反拇趾
遠い目で水へ水への 桜抱く

首夏の窓 植村蘇星

山椒の芽 高木晶子

相応に高みへ 一步青き踏む
日の本の言の葉 美しき風光る
爛漫のこまど 大窓首夏の窓
七色に 天空染むる 鯉のぼり
生かされて 気骨新たに 更衣

たんぽぽに壁は 確かな後ろ盾
囲まれて 男盛りの 花吹雪
足跡は 踏み固めたり 山椒の芽
国訛握手に 勝るよもぎ餅
天敵を 睨み返して 五月晴

神麓集

かもめ五羽 伊藤希眸

銀河系の端に夜ざくら眠れない
七重八重の桜に重き雨降り
菜の花畑肺の奥まで黄に染まる
島々に舵切る小舟海の春
かもめ五羽春の声立て島を発つ

覗き見 奥田筆子

覗き見の窮地の奥行昭和の日
目印はどくだみどしや降りの家なりき
朧夜のごとき記憶の会積かな
杜新樹誰も横顔漂はし
リラ冷えのたとへば薄き一番星

夕焼にゐた子 井上菜摘子

泰山木の花たれからも遠くゐる
大夏野風化仏に漂着す
裏山とよばれ全山滴れり
夕焼にきのふもゐた子一人欠く
略歴のさいご白花さるすべり

花洛の忌 山中志津子

春雷は原始の女性かも知れぬ
山葵沢ささやく踊子ものがたり
涅槃図に入る泣き方を教はりに
この星の行方知らずに鳥帰る
白川の流すともしび花洛の忌

神麓集

点滴 井尻妙子

甘すぎる荒川の桃父の忌過ぐ
点滴の滴々と今日みどりの日
退院す木綿の服にバラを抱き
退院の先づは一献薔薇の昼
地下に買ふマニキュアの青梅雨に入る

若葉して 鷺山珀眉

苺ほぼぼるこの愛は未然形
新緑を五臓六腑へたつぷりと
しゃべるだけしゃべり私しゃぼんだま
囀りや防犯カメラ作動中
若葉して山手線へ内回り

北帰行 亀井福恵

水面蹴り今し白鳥北帰行
うららかや土偶のごとき欠伸して
よんどころなく蛇穴を出づるかな
耕しの一鍬地虫おどろかす
初音とはかくも福音なりしかな

花くづ 西村白杼

囀にさそはれ結ぶ靴の紐
終りなき道への途中や花洛の忌
廃校の池に生まるる蛙の子
花屑にさへも躓くをとこ坂
ふらここや空まで飛んで星を蹴る

神麓集

花は葉に 菊池 和子

文机は頼杖の場所花は葉に
耳たぶに光る産毛や花菖蒲
首夏の風たこ足ハンガー十五本
青葉風しめりの肌の釈迦如来
枝蛙すこし肘あて座を移す

海市立つ 安田 優歌

入日光^マ片枝を染める夕ざくら
硯海は宇宙のみぎは海市立つ
花冷えに一灯ゆるる美唇仏
凡庸句を吉と悟れり初ざくら
肅肅と反戦ねがふ昭和の日

桐の花 本郷 公子

松の芯酒蔵つなぐ伏流水
初夏の窓辺硝子のバレリーナ
桐の花独りひとりへ母の文
蝌蚪生る小川の底の微熱あり
アリア流れ忘れじの日のさくら貝

遠回り 石原 孝人

沈丁の夜風をまとひ遠回り
追憶を手繰るや波止の春日傘
香を風に色を光に薔薇の園
囀りは遠流の島の挽歌とも
ぼうたんの音なく散りてよりの黙

春の風 佐藤 千恵

うららかやピカソの鳩の来てをりぬ
逢ひにゆく手櫛も軽し春の風
満開の桜は淡き影こぼし
花吹雪恋のうはさの残りたる
芥子菜の開けて薄らぐこころざし

初夏 山田 和

初夏や少女のリボン解く風
万緑の大雄峰へ独坐せり
昼灯す酒蔵の樽薄暑かな
庭奥の陶狸百才木の芽風
初蝶や女人高野へ橋渡る





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

水琴集

赤穂 久保みどり

補聴器の拾ふ初音と裏話
逃げ水や危ふき平和指数かな
進学を競ひ廃るる山家の灯
ややあつて桜と呼吸重なりぬ

ひと雨に木の芽解れむ嘻嘻として

福知山 松山 潤子

本籍はまだ未知数の蝌蚪の紐
蝌蚪育つ田の神の泥くすぐりて
さへづりや空に公園カフェのあり

筆海を進む大船花洛の忌
ひと筆は流るる雲に糸柳

習志野 上野紫泉

変はる東京片蔭のハチ公像
羽化の蝶濡れて閑かに翔つを待つ
憲法記念日暫く家を留守にする
杏の里「花終りました」の札ぼんと
花うつぎ身はふあふあと旅終る

藤井 玲子

趣味同じ聞いて聞かれて菊根分
耀うて和毛の光る猫柳
蓬餅母の手窪の恋しかり

京都 安田 呉遊

露味嗜や右党の我家脇役に
エプロンは自在の袋路の臺
激つ瀬の由良源流に木を流す

京都 安田 呉遊

奥駆けの行者の印や初筏
木流しの新半纏は八咫の紋
水温む賀茂源流の堰に立つ

村田真智子

老妓にも舞妓の昔花万朶
春夕陽湖金色の笑ひ皺

宮本 幸子

舞ふやうに舞へぬ初蝶明日がある
地に足し算空に引き算桜散る
ミモザ誉めコーヒーも誉め客の辞す

北桑田 荒田 義枝

花は葉に忘れ上手は生き上手
春の夢孕寿の坂のおだやかに

相生 伊東 淑子

雪柳ふたたびのなき齡となり
逃げる風追ふ風ありて四月馬鹿
句心の目覚めのノック目借時

福知山 吉本加代子

A面の暮しもどらず二月尽
人が来て春風がきてインターホン
蝌蚪の昼保育園は昼寝なり

噂に負けじと饒舌婆二人
蝌蚪何処変身終へて大海へ
満開のさくら飽和度最高日

大家族身を寄す蝌蚪の譲りあひ
初歩からを学びし傘下花洛の忌
開花まつ視線のあつき標準木

廟や平穩の地へ無事の着
卒業の子の持つてゐる夢袋
寄せ書きの夢生き生きと卒業す

切り貼りの花の影散る春障子
我が道の迷ひは進歩水仙忌

琴の音の洩れくる宵の春障子

英華採集

A面の暮しもどらず二月尽

福知山 吉本 加代子

黛まどかの句に「旅終えてよりB面の夏休」がある。この句は、夏休みに計画されていた旅行を非日常のものと捉えてA面とし、旅から帰った日常の夏休みをB面とした巧みな比喻により効果を上げている。掲句は、逆に日常の暮しをA面としているが、長かったコロナ禍による非日常の生活に鬱屈感を覚えた作者のもどかしさがよく出ている。約三年続いた新型コロナウイルスは五類移行の措置が決まり普通のA面の暮しが戻りそうである。

満開のさくら飽和度最高日

福知山 村田 真智子

今年の桜の開花は、全国的に例年よりも少し早く、開花中の天候も強い雨も強い風もなく十分楽しむことが出来たようである。個人的には今年は卒業式に間に合ったところが多かったのではないかと喜んでる。そして、偶然見た景ではあるが桜の最後の花吹雪は絶景であった。掲句の作者も同じ感慨で今年の桜を見たのではないかと。中七下五の措辞は、作者の気持ちを十二分に言い表しているように思う。来年の桜も、こうあつてほしいものだ。

卒業の子の持つている夢袋

北桑田 荒田 義枝

大学を卒業して既に半世紀が経過しているが、あの頃はどんな夢を持っていたのだろうか？そんな大それた夢ではないと思うが多少なりとも誰もが希望を胸に巣立っていったのではないかと。この半世紀の間に世界を震撼させた幾つかの事件を顧みると若者たちが関わりあっていることが多々ある。社会に出る前に抱いていた希望、夢はどうしたのか、と思う。掲句の夢袋は、これから卒業していく若者たちに大事にしてほしいと願う作者の思いであろう。